

令和 5 年 4 月 12 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K04822

研究課題名(和文) フランス近代住宅における「デコール」の変容から見る近代建築史の新しい叙述

研究課題名(英文) A New Description of Modern Architectural History viewed from the Transformation of "Decor" in Modern French House

研究代表者

千代 章一郎 (Shoichiro, Sendai)

島根大学・学術研究院環境システム科学系・教授

研究者番号：30303853

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：建築作品における「装飾(デコール)」の近代性という主題について、その変容を叙述した。結節点となるのはル・コルビュジエであるが、「デコール」の史的展開はル・コルビュジエに最も影響を与えたオーギュスト・ペレに遡ることができ、ル・コルビュジエを経由して、シャルロット・ペリアンらにおいて建築/装飾の二元論を解体するような理念として引き継がれていく。そこに通底する主題は、ペレにおける「肉」、ル・コルビュジエにおける「装備」、ペリアンにおける「身振り」として表現される身体性の問題である。その意味で、20世紀における「デコール」は、ウィトルウィウスの建築論の伝統を引き継いでいるとも言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代建築史学では論じられていなかった「デコール」の史的展開を明らかにした本研究成果は、これまでにない独創的なものであり、近代建築史のブレークスルーとなる学術的発展が見込まれる。さらに、近代における「デコール」の一端を明らかにすることは、近代建築遺産の難題の一つ、とりわけ近代住宅において不可欠でありながら保存の対象外とされてきた家具の保存という難題にも、筆者独自の解決の糸口を提供することができる。

研究成果の概要(英文)：The theme of the modernity of the 'decor' in architectural works is described in terms of its transformations. The historical development of 'decor' can be traced back to Auguste Perret, who had the greatest influence on Le Corbusier, and through Le Corbusier was succeeded by Charlotte Perriand and others as an idea that deconstructed the architecture/decor;cor dualism. The underlying theme is the question of corporeality, expressed as 'flesh' in Perret, 'equipment' in Le Corbusier and 'gestures' in Perriand. In this sense, the 'decor' of the 20th century continues the tradition of Vitruvian architectural theory.

研究分野：建築史・意匠

キーワード：装飾(デコール) オーギュスト・ペレ ル・コルビュジエ シャルロット・ペリアン 肉 装備 身振り

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

アドルフ・ロースの「装飾と罪悪」(1908)が近代建築思潮の典型としてしばしば引用されるように、近代建築運動とは「装飾」の否定であるという説が一般化している。階級社会のシンボルとしての装飾が手仕事によってつくられる時代から、建築生産技術の工業化による大衆社会への移行のなかで、「装飾芸術」「応用美術」「工芸」などの様式的な「装飾」は、一般大衆の生活の機能的な観点から見た余剰であり、贅沢な無駄と見なされるようになった。それをロースは、「オーナメント」の罪悪として批判した。

しかしそもそも、建築における「装飾」は多義的な概念であり、「オーナメント」、「デコレーション」、「アドーン」などの厳密な定義はなく、古代から中世、近世まで、さまざまな文脈で議論されてきた(森田慶一、『建築論』、1978)。実際、ル・コルビュジエをはじめとするフランス建築思潮において、室内空間の「デコール」としての家具そのものはむしろ積極的に論じ、それを革新しようとしている(ル・コルビュジエ、『今日の装飾芸術』、1925など)。さかのぼれば、古代ウィトルウィウスの『建築論』において、「デコール」は単に表面を飾る「オーナメント」のことではなく、建築制作原理の一つであった。つまり、「デコール」は建築作品の躯体そのものではないが、その空間を演出するのに不可欠な要素と考えることができる(たとえば、花模様の壁紙や調度品のようなシャンデリアや彫刻の施された椅子などのない近代住宅には、余剰としての「オーナメント」はないが、壁の素材や採光方法や家具の処理は住宅に不可欠なある種の「デコール」である)。

したがって、近代建築思潮における「装飾」概念の否定は、「オーナメント」の否定である一方、古典時代から連綿と続く「デコール」の主題・対象・方法・様式の組み替えであり変容ではなかったか、という学術的問いを立てることができる。すなわち、たしかにル・コルビュジエにとって家具が「デコール」の問題となっていた。では、それはどのような歴史的背景があり、またその「デコール」の問題はどのような拡がりを見せていったのか、という問いについては、これまでの研究で明らかにされていない。

2. 研究の目的

本研究では、フランス近代住宅を通して、近代建築史における「装飾」の問題を「否定」ではなく、「デコール」の「変容」という観点から近代建築史を叙述するために、「デコール」の時間的変容および同時代的展開という2つの視点から、「装飾」の否定の内実を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) **19世紀後半装飾芸術運動のル・コルビュジエによる解釈**：ル・コルビュジエは1910年にウィーンやドイツ各地の装飾芸術運動の主題、とりわけ家具を中心とした可動要素と室内空間との関係に関する考察を通して、19世紀後半の合理的デザインへと移り変わる動向を分析していることが、ル・コルビュジエ財団に残された手帖・書簡の資料からわかっている。そこで、ドイツ近代建築研究者、田所辰之助氏の助言を得ながら、ル・コルビュジエが見聞した作品事例から、ル・コルビュジエの「デコール」解釈を明らかにする。

またその一方で、ル・コルビュジエは故郷のラ・ショー＝ド＝フォンにおいてアーツ・アンド・クラフツの影響を受けた個人住宅を設計している。これらの住宅作品(5作品)と室内装飾については、資料的な限界もあり、既往研究の蓄積は限定的である。そこで、ラ・ショー＝ド＝フォン図書館やル・コルビュジエ財団の資料、及び現存作品の現地調査によって、その家具配置を手掛かりにして内部空間の構成を分析し、ドイツの装飾芸術からの影響を明らかにする。

(2) **オーギュスト・ペレのル・コルビュジエの住宅への影響**：ル・コルビュジエの建築において、青年期におけるペレとの関わりはとりわけ重要であることが指摘されているが、住宅については、両者の間で書簡を通じて、とりわけ家具について多くの議論を重ねていることが、予備的調査でわかっている(千代訳、『ル・コルビュジエ書簡撰集』、2016)。しかし、ペレの住宅作品(主に13作品)についての「家具」の分析を主題的に行ったものは既往研究がないために、ル・コルビュジエのペレ建築解釈を再整理すると同時に、20世紀建築資料センターにおいてペレの建築図面を収集し、建築(壁)・家具の関連性の分析を通して、ル・コルビュジエの「家具」の配置方法への影響を明らかにする。

(3) **「デコール」の同時代的展開**：アトリエ・ル・コルビュジエに在籍した建築家のなかでも、シャルロット・ペリアンは数多くの内装や設備の設計を任されている。ペリアンについては、研究の準備段階において、すでにル・コルビュジエとの協働建築作品の予備的考察を始めている(研究業績)。本研究ではさらに、それらの作品についてシャルロット・ペリアン財団における資料の精査によって、両者の協働形態及びペリアン独自の「デコール」の展開を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 19世紀後半装飾芸術運動のル・コルビュジエによる解釈：

ル・コルビュジエこと青年期のシャルル＝エドゥアール・ジャンヌレによるドイツにおける装飾芸術運動の研究(1910)に着目し、それをまとめた報告書『ドイツ装飾芸術運動の研究』では、

リーマーシュミットにしてもミューラーにしても、今日のドイツ装飾芸術の新しい潮流として名前が列挙されているだけである。しかし、『研究』の言説を支えた手帖の記述は、ザイドルのような対抗勢力についても評価している。逆に反アカデミズムの工房を主催していたヴィルヘルム・フォン・デプシッツなどに対しては、その新しい教育システムに批判的であり、ドイツとフランスの装飾芸術を必ずしも対比的に捉えるものではなかったことが分かる。

もちろんジャンヌレは、研究の目的であったドイツの「工業」について、フランス装飾芸術では遅れていた生産組織体制による装飾製品の細部にまで検証している。とりわけ可動家具の詳細機構の分析は、ジャンヌレの細部の眼差しを物語っている。

そしてジャンヌレは、機械化による量産家具の意義についても、その装飾性と同時に住宅における空間要素として評価している。そしてそれは、家具や建具を壁に固定する手法への関心につながっている。

一方で、フランスにおける「芸術」が今日の装飾芸術において時代遅れなものとなってしまったわけではない。実際、ドイツ研究旅行の途においてペーレンスの事務所で働いていた1910年の終わり頃には、ジャンヌレはすでにドイツの装飾芸術における製品をビーダーマイヤー様式やアンピール様式などの参照系として捉えるようになっていく。素材の品質や色彩装飾についての評価は、当時の機械化による低価格化とも直接的には結びついていない。量産される製品というよりはむしろ、量産可能性とは無関係な「作品」としての評価である。それゆえに、ジャンヌレは絵画作品もまた装飾要素として評価するのである。ジャンヌレの場合、機械化されているか、手仕事かに関わらず、製品・作品の品質、完成度あるいは独創性が問われているという意味では、「工業」と「芸術」には境界がない。

さらにジャンヌレは、絵画作品を壁面との関係から検証している。こうしてジャンヌレの装飾芸術への眼差しは、装飾要素の細部から、壁面装飾へ、そして床壁天井全体の室内空間そのものへと広がっていく。

すなわち、「類縁性」によって結び付けられた装飾要素の関係は、空間的な関係性そのものを含意していたのであり、単に様式的な統一性を意味するものではない。

こうした眼差しは、ル・コルビュジェの晩年まで持続している。晩年ル・コルビュジェは、当時を回顧して当時の「装飾」を定義している。「装飾はいわく定義しがたいが、純粹で明快な「装飾」は記号のようなものである。総合、つまり秩序だての結果である。とにもかくにも「装飾」すること。レプラトニエがル・コルビュジェに課した課題である。」

レプラトニエが教えた「スタイル・サパン（樅木様式）」と呼ばれる装飾は、様式的な「類縁性」の文脈で理解することができるであろう。しかしル・コルビュジェの後年の解釈では、「記号（表徴、きざし）signe」は、空間相互を結びつける関係性（「秩序」と呼ばれるもの）の問題であり、明らかに表面的な装飾ではない。ジャンヌレとしての手帖の記述から読み取れるものと同一のものを含んでいる。

「類縁性」は機械によって可能であることをジャンヌレはドイツで目の当たりにしたが、空間の関係性としての「記号」（装飾）は、機械に全面的に依存することはできない。ドイツでの手帖の記述に「芸術」の問題が描かれるのはそのためである。つまり、ジャンヌレ＝ル・コルビュジェの「装飾」概念には、機械技術による「工業」の主題と同時に、最後まで「芸術」という主題、手の問題がはじめてから含まれていることが、ドイツ装飾芸術運動の研究を通して、かえって浮き彫りになる。

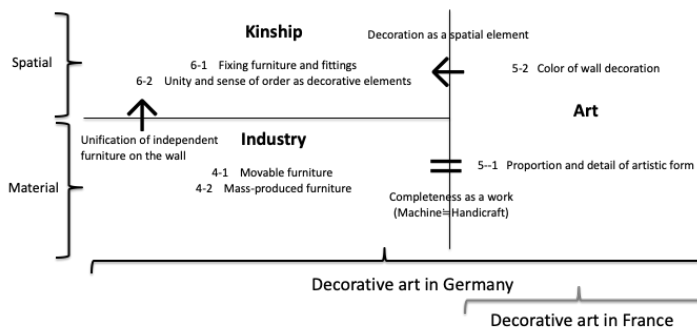


図1 『ドイツ装飾芸術運動の研究』における「装飾」の主題相関

(2) オーギュスト・ペレのル・コルビュジェの住宅への影響：

ル・コルビュジェ自身によって革新的とされた「装飾」としての室内装飾は、(起源であるかどうかは別に)少なからずペレの「瓶」の経験から発展してきた。ペレの「瓶」あるいは「旅行鞆」は、先ずばみの中空の単一空間であり、躯体構造が隙間を充填する壁紙によって覆われて統一感を演出し、構造からは分離する「動かせる家具」が配置されていた。

ただし、ペレの「動かせる家具」としての卓の配置は動かすべきではなく、室内装飾の中心的な役割を担っていた。それに対してジャンヌレは、ジュルダンの「動かせない家具」に触発され、1920年以後、「瓶」のなかの容れ物を限り少なくし、壁紙を排した平滑なヴォリュームの一部と

して家具を組み込み、いわば「建築」に吸収していった。それはいわば、構造体がより際立つような吹き向け空間による純粋な構造＝空間であるペレの「瓶」の発想を希釈化し、空間（ヴォリューム）そのものへと還元して家具も空間を分節・統合する「装備」としていくことに他ならなかった。

一方のペレは、1920年以後のル・コルビュジエを痛烈に批判していたにもかかわらず、「瓶」の純粋性を際立たせるような家具を最小限化している点において、両者は類似した論点を保持していた。しかしペレにとって、「家具」は柱によって構築される「瓶」を強調させる要素であり続ける。ペレは、柱の構造躯体を明瞭に表現した「瓶」のなかに自立し、生活における主要家具として卓と椅子というこの二つの要素を際立たせるという空間演出手法を通年的に保持していた。いずれにしても、「建築」と「家具」という概念の越境が両者の室内装飾の分岐点である。

(3) 「デコール」の同時代的展開：

著作としては『自伝』以外にはないものの、ペリアンは多くの記事や論文を発表している。「装飾」という観点から分類すると、1940年の来日頃、離日して第二次世界大戦後にパリに落ち着いた1950年頃を大きな節目としていることが分かる。つまり、ペリアンにおける「装飾」概念においては、ル・コルビュジエと日本という一見無関係な主題が関係していることが分かる。

ペリアンはル・コルビュジエのアトリエにおいて家具を手掛けながら、室内装飾の様式性を「新しい室内の設え」に置き換える。それはほとんどル・コルビュジエと共有されたアイデアでありながら、ペリアンの場合、建築の躯体と建具や家具の問題に主従関係はなく、両者を等価に扱っていたといってもよく、ル・コルビュジエによる「装備」を理論化する必要はなかった。

ペリアンが「新しい装飾」としてル・コルビュジエによって定義された「装備」を主題化するのには、来日を契機としていた。それは日本家屋の生活の中に見出された「標準」として捉え直され、岡倉による「空」の理論の現実であると解釈されるに至る。日本家屋の生活空間における「標準」によって、「過剰な装飾」が「裸」にされ、その「空」の生活空間において「はかない装飾」が具現化されるのである。

ペリアンにおいて、「空」である限り、生活空間において身体は限りなく周辺環境に開かれる。こうしてペリアンは、「動作」という身体性に逆行しつつ、身体を周辺の自然環境にまで結びつけた。季節にも応答する「はかない装飾」は、身体と建築（あるいは建築を取り囲む環境）の媒介概念として働き、建築空間における普遍性、あるいは恒常性を求めたル・コルビュジエとは異なる眼差しが鮮明になっていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 12件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 千代章一郎	4. 巻 78
2. 論文標題 オーギュスト・ベレの「装飾」概念の変容：「衣服」から「肉」へ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 建築史学	6. 最初と最後の頁 72-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 千代章一郎	4. 巻 87
2. 論文標題 オーギュスト・ベレの「瓶」とル・コルビュジエの「装備」による室内装飾 「動かせる家具」と「動かせない家具」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 432-441
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shoichiro Sendai	4. 巻 4
2. 論文標題 Japanese Anonymous Design in International Modern Culture	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Journal of the Asian Conference of Design History and Theory	6. 最初と最後の頁 144-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shoichiro Sendai	4. 巻 4
2. 論文標題 The Influence of 'Mingei (Folk Crafts)' on the Creative Theories of Charlotte Perriand	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japan Architectural Review	6. 最初と最後の頁 548-555
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shoichiro Sendai	4. 巻 open access
2. 論文標題 Charlotte Perriand's Formation of the Notion of the 'Vacuum' through a Reading of The Book of Tea by Kakuzo Okakura	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Asian Architecture and Building Engineering	6. 最初と最後の頁 open access
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 杉山 真魚・千代 章一郎・田所辰之助	4. 巻 87
2. 論文標題 ベイリー・スコットの住宅論における「装飾」概念の拡張	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 2767-2778
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 千代章一郎・田所 辰之助・杉山真魚	4. 巻 86
2. 論文標題 シャルル=エドゥアール・ジャンヌレ (ル・コルビュジエ) のドイツ装飾芸術運動研究における「装飾」の概念構成 「工業」「芸術」「類縁性」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 297-307
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 千代章一郎	4. 巻 76
2. 論文標題 アイリーン・グレイとジャン・バドヴィチの対話篇 近代における「装飾」の論理	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 デザイン理論	6. 最初と最後の頁 39-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千代章一郎・石原里美	4. 巻 26
2. 論文標題 アイリーン・グレイのE.1027 (1929)における空間の融通性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会技術報告集	6. 最初と最後の頁 764-769
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shoichiro Sendai	4. 巻 2
2. 論文標題 Realization of the Standard Cabinet as “Equipment” by Le Corbusier: The transformation of the “Wall”	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Japan Architectural Review	6. 最初と最後の頁 494-506
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/2475-8876	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shoichiro Sendai	4. 巻 18
2. 論文標題 The Conception of “Equipment” by Charlotte Perriand: Cross-over between Le Corbusier and Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Asian Architecture and Building Engineering	6. 最初と最後の頁 430-438
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 千代章一郎	4. 巻 74
2. 論文標題 アイリーン・グレイの言説における論理構造 : E.1027 の「壁」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 デザイン理論	6. 最初と最後の頁 51-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 古澤太晟・千代章一郎
2. 発表標題 ル・コルビュジエ・センターの制作過程からみた平面構成における生活空間と芸術空間の融合
3. 学会等名 日本建築学会近畿支部研究報告集
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古澤太晟・千代章一郎
2. 発表標題 ル・コルビュジエ・センターの制作過程による立面構成からみた生活空間と芸術空間の融合
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集 / 建築デザイン発表梗概集
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 千代章一郎・杉山真魚・田所辰之助
2. 発表標題 シャルロット・ペリアンにおける「装飾」概念の構成
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集 / 建築デザイン発表梗概集
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉山真魚・千代章一郎・田所辰之助
2. 発表標題 ベイリー・スコットの壁面装飾について
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集 / 建築デザイン発表梗概集
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 千代章一郎
2. 発表標題 オーギュスト・ペレにおける「瓶」とル・コルビュジエの「装備」：「動かせる家具」と「動かせない家具」
3. 学会等名 日本建築学会近畿支部研究報告集
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 千代章一郎
2. 発表標題 オーギュスト・ペレの「装飾」概念の変容：「衣服」から「肉」へ
3. 学会等名 建築史学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 千代章一郎・田所辰之助・杉山真魚
2. 発表標題 シャルル＝エドゥアール・ジャンヌレのドイツ装飾芸術運動研究における「類縁性」について
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集 / 建築デザイン発表梗概集
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 千代章一郎
2. 発表標題 オーギュスト・ペレにおける「瓶」とル・コルビュジエの「装備」：「動かせる家具」と「動かせない家具」
3. 学会等名 日本建築学会近畿支部報告集
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 千代章一郎
2. 発表標題 オーギュスト・ペレの「装飾」概念の変容：「衣服」から「肉」へ
3. 学会等名 建築史学会、2021年度大会（研究発表会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 千代章一郎・田所辰之助・杉山真魚
2. 発表標題 シャルロット・ペリアンにおける「装飾」概念の構成
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集 / 建築デザイン発表梗概集
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 千代章一郎
2. 発表標題 「装備」の制作における シャルロット・ペリアンとル・コルビュジエの共同性
3. 学会等名 第63回意匠学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石原里美・千代章一郎
2. 発表標題 アイリーン・グレイが示唆するE.1027における空間の可変性
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 板藤耀也・千代章一郎
2. 発表標題 ル・コルビュジエによるカブ=マルタンの住まいの寸法体系
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 千代章一郎・田所辰之助・杉山真魚
2. 発表標題 シャルル=エドゥアール・ジャンヌレのドイツ装飾芸術運動研究における「類縁性」について
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関